

## 猪と人々のくらしー大宜味村を事例にしてー

松川 聖子\*

### Ryukyu Wild Boar and the Life of People in Ogimi Village

Seiko MATSUKAWA

#### はじめに

沖縄本島の北部に位置する大宜味村は、自然環境の豊かな、まさに山原（ヤンバル）と呼ぶに相応しい地域である。村に住む人々は、昔から山や海などの自然環境を大いに利用して生活してきた。特に各集落の背後にある山は、人々の日常生活と密接している場であり、生計維持（燃料/飼料/肥料/生活用具）・衣食住・儀礼・薬・遊びなどにおいて、非常に重要な役割を果たしてきた。

生活の様子が大きく様変わりした今日では、農業に従事している人々が山を畠地として利用し、畠に行く以外で山に入る機会は少なくなった。しかしながら、いまだに自然環境に関する人々の民俗知識は驚くほど豊富である。

人々の暮らしと自然の関係に注目した筆者は、大宜味村における猪猟を本稿のテーマとし、調査を行った。後に詳述するが大宜味村では、猪は畠の作物を荒らす害獣であり、猪と人間の攻防の中には、たくさんの民俗知識といえるものが含まれていた。自然と人間の結びつきが薄れつつある現在もなお続いている猪猟は、従来民俗学でなされてきた狩猟民俗の研究においてはもちろん、「自然と人々の生活のかかわり」という観点からも大変興味深いテーマであると考えている。

本稿では聞き取り調査で得られた情報を中心に「猪と人々の生活」について記述し、考察していく。また以下では猪を指して、基本的には「猪」と記述するが、文脈によっては単純に種を意味するイノシシ、または和名のリュウキュウイノシシ、ま

たは方言名のヤマシシと使い分けることとする。

#### 序 章

##### 第一節 研究史

###### 1. 狩猟民俗に関する研究

民俗学において、「狩猟」というテーマは早い段階で注目されており、主な著書としては柳田国男が『後狩詞記』で狩猟伝承の聞き書きを行なったのを始めに、早川孝太郎の『猪・鹿・狸』や、全国各地における調査から千葉徳爾の一連の著書『狩猟伝承研究』などが刊行された。それらには現在では調査が困難になりつつある狩猟伝承が多く記され、今後の狩猟民俗研究における基礎資料・参考資料としても非常に価値が高いものだといえる。以後にも多くの研究者が著した著書や論文などによって、これまでに蓄積された全国の狩猟民俗に関する資料は膨大なものになっている。

###### 2. 沖縄における猪猟に関する研究

沖縄においては、もともと狩猟民俗に関する研究は少なく、猪猟に関する研究も多くない。先行研究資料の中で、沖縄の猪猟を民俗学、或いは人類学的な観点から考察した一番古いものは、千葉徳爾の「南西諸島のいのししとその狩猟」という論考であつた（千葉, 1971）。その中で千葉氏は奄美以南に生息するリュウキュウイノシシとその狩猟について述べ、猪の生態・獵の実際・猪の処理や消費・猪狩りの目的それぞれについて南西諸島各地で聞き取った

\*〒903-0823 那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

例を挙げながら考察している。

そして本稿の調査地でもある沖縄本島北部の猪獣について書かれているものには、平敷令治の論文「山原の猪垣・猪狩・猪狩儀礼」や（平敷, 1991）、山原猪研究会の会報である『ウーガチ 奥特集』などがある（山原猪研究会, 1994）。この2つは猪獣に関する考察がなされているというよりも、聞き取り調査の成果を記してある「調査報告書」の性格が強いという印象を持つ。これらの情報は、猪狩りを行なう人が減少している上、聞き取り調査によっては伝統的な狩獣伝承の調査が困難になりつつある現在で、狩獣民俗研究を行なうための資料として大変貴重である。

しかしこれまでに挙げた千葉氏の論考・平敷氏の論文・山原猪研究会の会報が、猪の生態・獣の目的・獣の実際やその技術・猪の処理や消費に主眼が据えられたものであった中、今井一郎の「八重山群島西表島におけるイノシシ獣の生態人類学的研究」はこれらの項目も含めた上、人の生活環境にも焦点を当てていた（今井, 1980）。「とくに陸上の自然と人間との結びつきに注目した」（今井, 1980: 3）という今井氏は論文中で、調査地である西表島の自然環境や人々の生業などについても触れ、猪獣について総合的に考察している。

今井氏の研究目的は「現在みられる獣活動の具体的な記載を行ない、獣の歴史や社会的背景に注意をはらいながら、それを時間的、空間的に分析し、考察を加え」ることであり（今井, 1980: 3）、彼は長期にわたり島に滞在して自然環境・人々の生活環境の把握をした上で、獣活動の参与観察を行なっている。論文では、聞き取り調査によって得られた情報は多くないのか、方言名などの民俗語彙があまり出てこない。また、狩獣免許など獣をめぐる制度的な記述も特に記されていない。しかしながら報告は詳細であり、臨場感がある。調査者自らの参与観察によって、民俗学において主とされる調査方法「聞き取り調査」だけでは表現しきれないところをうまく伝えていると考えられる。

## 第二節 研究目的と方法

沖縄においてこれまでになされてきた狩獣民俗の研究は第一節で述べたとおりだが、本稿の目的は単

に狩獣民俗知識の収集・記述をするのではなく、主として大宜味村における「猪と人々の生活の全体的な関係」を考察することにある。そのためには猪そのものや猪獣の実際にに関する民俗知識を聞き書きする事以外に、人々と猪を結びつける農業や猪に対する人々の認識についての聞き取り調査を行うことも重要である（注1）。調査は、実際に猪獣を行う獣師の方だけではなく、獣は行わないが猪の被害に遭ったり、猪を目撃した事のある農家の方もその対象にし、さらに大宜味村の人々が猪をどのように認識しているかを知るために農業を行っていない方にも話を伺った。調査中はできるだけ年代を意識した聞き取りを心がけ、民俗変化の過程を整理し、相対的な流れを把握することに努めた。

また猪と人間の関係を全体的に論述していくとき、人々からの聞き取りによる情報のみならず、猪と猪をめぐる自然環境に対する自然科学的なアプローチからその生態を記述することや、野生生物を捕らえる際の行政的な取り決めを記述することも必要である。

本稿ではまず第一章「猪と人間」で、猪とそれに関わる人々の生活環境や、猪が農作物へ与えている被害の状況について触れ、猪と農家の農作物をめぐる攻防を述べる。そして第二章「猪獣」で猪獣の実際を記述し、獣師が猪を捕らえ、それを処理するまでの過程を記録する。さらに第三章「ヤマシシに対する人々の認識」では、さまざまな立場の人々がヤマシシをどのように捉えているのかについて考察する。

## 第一章 猪と人間

### 第一節 大宜味村の農業

現在の大宜味村において、農業は総生産額の50%を超える基幹産業である。以下では、猪と人間の関係を述べる上で最も重要である大宜味村の農業について取り上げ、紹介していきたい。

#### 1. 耕種について

大宜味村では現在、村外・県外への出荷用としてサトウキビやパインアップルやウンシュウミカン・タンカン・シークヮーサーなどの柑橘類が栽培されている。サトウキビは戦前、パインアップルと柑橘類は

戦後直後から栽培されている換金作物であるが、近年ではアイリス・電照キクなどの花卉栽培や観葉植物の栽培も行なわれるようになり、耕種が多様になっている。

また出荷用とは別に、村内の商店・共同売店・「道の駅おおぎみ」などの観光地で販売する農作物も作っている。この場合の耕種は、出荷用ではないので多岐に渡っているが、例えばダイコン・イモ・マメ・キャベツなど日常生活において食べる頻度の高い作物が多い。大宜味村内において農作物を生産・販売することによって輸送コストの低減、鮮度の保持、地域経済への貢献などのメリットが挙げられ、小さな「地産地消システム」が成立している。

さらに、販売用ではなく自家消費用として小規模に農作物を作る人もおり、この場合も普段よく食べるものを作ることが多い。自家用だけでなく、離れたところに住む家族・親戚等に渡る場合も多い。

## 2. 畑について

古来から農業が盛んな大宜味村には、しかしながら、はじめから農業を行なうに適した肥沃な土壌が多くあったわけではない。

村の総面積の76%は山林で、そのほぼ中央には標高300m内外の山々が連なっている。それらは海岸の近くまでせり出しているため低地・平坦地は極めて少ない。集落は狭い谷底平野や海岸平野に集中しているが、海岸に接する急傾斜地の奥に標高150mから200mの広い段丘面が発達しており、ここに開墾地を求めているため家から畠までには少々の距離がある。また土壌は、ph（酸性度）4前後の強酸性土壌の赤土で、農作物の耕種を限定する要因となっている。

しかし、一部地質が古生期石灰岩からなる地域の畠や、海岸沿いの集落近く、或いは集落内にある畠の土壌はphが比較的高く砂地もあるので、イモ・マメ・ニンジン・ダイコンなどを育てている人もいる。特に集落内や屋敷内の中規模な畠はアタイグワーと呼ばれ、そこで自家消費用の作物を作っている人が多い。

## 第二節 大宜味村の猪

### 1. リュウキュウイノシシ

ここでは、文献資料などから現在明らかにされているリュウキュウイノシシの生態を紹介する。

現在沖縄に生息しているリュウキュウイノシシは1924年、黒田長礼によって新亜種として記載された。リュウキュウイノシシは奄美大島・徳之島・沖縄本島・石垣島・西表島に分布する小型の猪で、沖縄における野生生物の中では最大の哺乳類である。またその食性は雑食性で、昆虫類・ミミズ・カタツムリ・カニ・ハブなどの動物や、シイの実・タケノコ・サツマイモ・サトウキビ・パイン・ミカンなどもよく食べる（池原ほか、1984：65）。

そして『日本の絶滅のおそれのある野生生物』によれば、「徳之島のリュウキュウイノシシ個体群は個体群としての維持が危ぶまれる水準まで減少していると推測され」ており（環境庁自然保護局野生生物課、1991：84）、環境省カテゴリーでは「絶滅のおそれのある地域個体群」に認定されているが、その他の地域のリュウキュウイノシシについては情報不足に相当する「未決定種」となっている。沖縄においてはリュウキュウイノシシに関する自然科学的な研究が未だ進んでおらず、その生態や個体数など、明らかになっていないところは多くあるようだ。

## 2. ヤマシシ

ここでは聞き取りによって得られたリュウキュウイノシシの生態を紹介する。特に猪の行動などについては文献資料に記されていることよりも情報が多く、人々が長い間猪を注意深く観察してきたことが分かる。

### (1) 呼称について

大宜味村では、リュウキュウイノシシを方言でヤマシシと呼んでいる。ヤマシシは子供がいる場合群れをなして歩き、それがよく見られるのは春と秋の、年に2度である。普通子供の猪はウリンボーとかアカラグワー（赤毛であることから）と呼ばれるが、春（4月から5月）生まれの仔猪はイチユビグワー、秋（9月から10月）生まれの仔猪はシイグワーと呼ばれたりもする。ふつう「イチユビ」はナワシロイチゴを指し、「シイ」はイタジイを指すが、春や秋に現れ、その季節にシイの実やイチゴの実に類する

ものを食べて育っていると思われる仔猪を指して、それぞれイチュビグワー、シイグワーと呼ぶのである。

## (2) ヤマシシの行動

ヤマシシは決まった巣を持たずにエサを探して移動を繰り返すというが、子供を産む時は巣らしきものを作ることもあるようだ。それは木切れなどを使って非常に丈夫に作られるといわれ、上から人が押さえつけたりしても少々のことでは壊れないという。

ヤマシシは成獣で40kgから50kgになり、その中でも赤毛のものと黒毛のものがいるが、それは種類が違うのではなく、年齢が違う。毛色は年を経るにつれてだんだん黒くなってくるもので、大型（といつても50kg前後だが）のヤマシシの毛色は黒い。ヤマシシの年齢は、毛色・牙・足の爪で大体判断でき、牙や足の爪は、その発達の程度で年齢が分かる。また成獣に関して、特に肩から前足にかけてはヤマワイ（山割り）と呼ばれ、ヤマシシの一番かたい部分である。そこは名の通り、山を突き進んだり土を掘り返したりすることが可能で、その強さは銃弾も貫通させないほどだという。そのため銃による獵の際は、ヤマワイを狙わない。この部分に心臓を守られて仕留められずに、逃げられたり反撃されてしまったりする恐れがあるからだ。

そして彼らは、半径約10kmであるといわれる生活範囲の中でエサを探して食べる。食性は雑食で、山野にある草木の実やミミズ・カニ・ハブなどの動物はもちろん、人の植えた作物や花も食べる。実際に怪我をしたという例は、今回の調査では聞けなかつたが、雑食性のヤマシシの糞にはハブの毒牙が入っている恐れがあるので、人が裸足で踏んではいけないといわれているほどである。しかし彼らは非常に警戒心が強く、鼻の利く動物であり、人間には決して近づかない。そのためヤマシシが糞に現れるのは、あまり人間のいない朝方や夕方が多い。ヤマシシは一般的に夜行性だと言われているが、そのすぐれた嗅覚で人間を避けているだけなのだとしたら、その限りではない。実際、昼間に複数頭で人間の運転する重機の側までやってきて、重機が掘り起こした土中のミミズを食べることがあったと話す人もおり、彼が重機から降りると逃げていったそうだ。

また、一般的に猪の習性としてよく知られている

のが「前進、それも曲がったりせずまっすぐ進むことのみ可能」というものであるが、ヤマシシも同様である。身の危険を感じて走って逃げる際、例えば大木など何らかの障害物に突き当たってはじめて方向転換をする。獵をするためにヤマシシを追いかけた経験のある男性は「山の中でも、自分〔ヤマシシのこと－引用者注〕が体当たりして倒せるものは全部突き倒してでもまっすぐ進む。小さい木ぐらいまでは何て事はないだろう」と話す。しかし、後進や頭から山を駆け下ることは不可能で、その習性を利用して獵を行う方法もある（後述）。

さらに、ヤマシシには決まった通り道があり、そのようなけものの道はウジと呼ばれる（写真1・写真2参照）。それは一見分かりにくいが、よく見ると



写真1 ウジの写真。山肌が現れている部分がウジ。



写真2 ウジの写真。分かりにくいが、写真中央の開いている部分がウジ。草が少し倒れている。

確かにヤマシシの足跡があつたり、周囲よりも山肌が少し現れていたり、低草木が倒されてたりしている。ヤマシシの被害に遭つたり、獵を行つたりしている人々はウジをすぐに見つけ、残された足跡などから何日前のものか判断することができる。また、ヤマシシが泥浴びをする場所をヌタバ（写真3参照）



写真3 ヌタバの写真。ヤマシシが自ら土を掘って、泥浴びをした跡。

といい、自ら土を掘ってヌタバを作ることもある。ウジやヌタバに人間が近づき、そこにヒトの匂いの残っている間はヤマシシは決して現れない。1週間から2週間の時間をおくか、雨が降ったりなどすれば再び姿を見せるが、このようなところでもいかにヤマシシの嗅覚がすぐれ、警戒心が強いかが分かる。

現在では、昔ほどヤマシシの姿を見かけなくなつたと話す人は多いが、今なお畑に現れては農作物を食い荒らし、農家に被害を与えていた。

以上のように大宜味村の人々は、ヤマシシについてたくさんの知識を持っている。これは人々の生活とヤマシシが深くかかわっており、人がヤマシシに対して大いに関心を寄せているということに他ならない。次節では、人の生活とヤマシシがどのように深く関わっているのかを述べたい。

### 第三節 ヤマシシによる獣害

#### 1. ヤマシシによる農作物への被害

大宜味村の人々の生活とヤマシシは、農作物をめぐって深く関わっており、畑への被害は現在でも後を絶たない。ヤマシシは、山野の中よりも畠のほうが食べ物は豊富にあるので、人間に出会う危険を冒しても畠へ出ていく。彼らが特に好むのはイモで、主食が米に成り代わった現在では、アタイグワー（家庭菜園）などで小規模にしか植えられなくなつたが、それを目当てにヤマシシは集落内に現れ、人の屋敷内まで入ってくることさえあるという。

ヤマシシは非常にすぐれた嗅覚を持つ上、頭が良い動物である。サトウキビや柑橘類やイモは、成熟して収穫間近な頃に食べられてしまう（写真4・写真5参照）というが、これは嗅覚によって食べ頃か

否かを判断しているのではないかといわれている。サトウキビについては畠の外側からかじっていくのではなく、畠の真ん中に入つてから食い荒らす。外見からは畠が荒らされているのかどうか判断が付きにくいので、農家のによれば「収穫の時になつて気が付いたら畠の真ん中は運動場〔状態ー引用者注〕だった、ということもある」という。また柑橘類も人間が食べるようきれいに皮をむいて食べ、「それ〔ヤマシシの仕業であることー引用者注〕を知らない人はミカン泥棒かと思うほど」であるそうだ。さらにパイナップルならば新芽のうちに食べられ、パパイヤや芭蕉ならばその根っこを掘り起こして食べられてしまうのである。しかしそれだけではなく、ヤマシシはこれらの農作物を食い荒らす時、少しの作物を最後まで食べきるのではなく、たくさんの作物を少しづつかじり、広範囲にわたって畠を荒らしてしまうので、農家にとってヤマシシによる獣害は大変深刻な問題である。

農家の方も農作物を守るために、畠に柵を設けたりネットを張り巡らせたりなどとさまざまな防御策を練るが、柵は1m未満のものであれば飛び越えられ、ネットは噛み千切られたりすることもある。しかし本章第一節で述べたとおり、家から畠までには少しの距離があり、特に夜間などはヤマシシが現れてもなかなか目が行き届かないという現実がある。どうやら農作物を食べるためにはヤマシシを、畠にて「防御する」のみでは、農作物を十分に守ることは困難であるようだ。

しかしながら、このように農家にとって生活を脅かす存在であるヤマシシは、なぜかジャガイモとダイコンには手を出さないといわれている。これは獣害とは直接関係ないが、興味深い昔話があるので以下に紹介したい。筆者が情報として得たのは、宇賀名城の女性から実際聞いた話を基にして、塩屋保育所が2000年に発行した絵本『ヤマシシとだいこん』（大宜味村立塩屋保育所、2000）である。おおまかにあらすじを紹介すると、「イモ畠の獣害に悩む人たちに追いかけられ、危うくヤマシシ汁にされるところのヤマシシを、優しいダイコンはその葉にヤマシシの身を隠してやった。それ以来ヤマシシは、命の恩人であるダイコンを食べなくなった」というものである。

ヤマシシはダイコンを食べずにその身を人間から守ってもらい、ダイコンはヤマシシに食べられずに大きく育つ。昔話においても、ヤマシシは農家にとっての害獣だとされており、共生・共存の関係にはないようだ。



写真4 荒らされたイモ畠。土が掘り起こされている。



写真5 荒らされたタンカン畠。夜間撮影されたので分かりにくいが、タンカンの皮はきれいに剥かれ食べられている。

## 2. 大宜味村の猪垣

猪垣は、ヤマシシが耕地へ侵入するのを防ぐ目的で1770年代から作り始められた。それは国頭村から名護市まで何集落にもわたって張り巡らされており、かつてその長さが31000m余りあったことから「十里の長城」とも表現された。大宜味村では猪垣をして方言でシシガキとかヤマシシガキと呼んでおり、

現在では山の開拓などによる破壊を免れた部分が遺構として残っているだけで、本来の役割を果たすというよりも「村の文化財」としての位置付けが強い。

戦前までは実際に猪垣は機能しており、各集落単位で区間を分担してシシガキを管理していたという。分担区域のシシガキが壊れ、そこからヤマシシが侵入すると大変なさわぎになったといい、共同責任によって集落に罰金が科せられてしまうこともあった。それを避けるため、シシガキブーといってシシガキを補修・改修する賦役が行われていたが、字屋古に住む話者によれば、終戦後1度だけシシガキブーがあったのを最後に、以降は手入れをしていないという。

シシガキは場所によって造りに違いがあり、石墨・土墨・切り土・堀切・岸壁などがある。それらは各々の地域の地形や地質や植生など、自然をうまく活かして造られたもので、海岸近くのシシガキの中には、切り土の上縁部にテーブルサンゴを軒状に差し込んでヤマシシが垣を越えられないようにしたものもある。

村の人に案内して頂いて筆者が実際に歩いたのは、字押川にある石墨のシシガキで、リゾート「サンセットビュインシャーベイ」跡地から入る散策道（村の予算で4～5年前に造られたという）に沿つてあるものだった（図参照）。石墨は、もともと周辺にあった石を人が積み上げたもので、その場所は石灰岩地帯であることが窺える（写真6・写真7参照）。その付近には自然の大岩がそのままシシガキの役割を果たしている箇所もあった。

ヤマシシから農作物を守るために造られたシシガキが使われなくなったのは、戦後の混乱や人口の減少や山の開発による破壊もあったが、もともとその管理の困難さも大きな理由だったと考えられる。戦後になって「ヤマシシを侵入させた集落の共同責任を問う」ことがなくなつてからは、それまではしっかりととなっていたシシガキの手入れや管理がなされなくなり、獣害対策の方法は各々の農家に委ねられていったと思われ、またその方法の一つとして行われる猪猟の様子も、次章で詳述するように変化していったと考えられる。

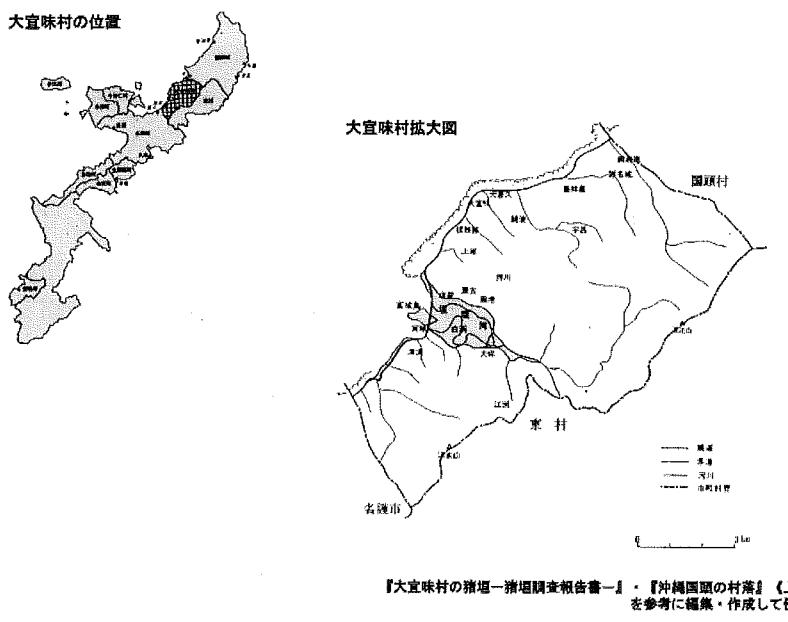


図1 「大宜味村の位置・拡大図」



写真6 猪垣



写真7 猪垣

## 第二章 猪猟

### 第一節 猪の目的

猪猟は、人々が農耕を行う以前から行われており、『大宜味村の猪垣—猪垣調査報告書一』によれば、「四面海に囲まれ魚介類・海藻類にめぐまれているとはいえ、海の荒れる日がつづくときはもっぱら陸上の動植物に依存しなければならなかつた。大型動物の棲息しない沖縄では猪は最大の獲物であり、猪狩りは貝塚人の生活がかかつた狩猟であった」という（大宜味村教育委員会、1994：33）。人々にとってヤマシシは、肉を食べる機会があまりなかった頃までは貴重なタンパク源であり、その当時を知る人は、日本復帰前くらいまでは食料として盛んにヤマ

シシが捕られていたと話す。特に戦前や終戦直後は、肉などの以前に食料自体が不足状態にあつたため、積極的に山に入って猪を仕留めてくる人も多くいた。しかしながら戦後になって、食糧増産を奨励するため硝酸アンモニアなどの金肥が配給されると、それまでよりも換金農業に力を入れるようになつた。そのためそれ以来、ヤマシシを狩る目的は「食料の確保」よりも「害獣駆除」に重きがおかれるようになつたのは明白である。

もちろん現在でも捕ったヤマシシは人々に好んで食されるが、ヤマシシの肉を「食べるためには捕る」のではなく、畑を荒らす害獣であるヤマシシが「捕れたから食べる」のである。猪猟の目的の変化は、

人々の食糧事情の変化によってもたらされたと考えられる。

## 第二節 猿法の変遷

### 1. 猿師について

猪猿を行う猿師を、大宜味村ではヤマシトゥヤー（ヤマシシを捕る人）と呼ぶ。ヤマシトゥヤーは専業の猿師ではなく、農業や林業を行う一般の人である。そのため彼らにとっても、ヤマシシによる獣害は決して他人事ではない。

本土の狩猟民俗研究においては、狩猟を行う猿師について、彼らが「狩猟民」か否かという議論が今後の課題の一つであるという。永松氏は「農耕専従者にはない独特的神観念や習俗、宗教性を有する狩人たちを、農耕民俗の一部とする捉えかたでは、なかなかうまく説明がつかない」（永松、1997：131）としながらも、「農業を営みながら、ある一定の期間、猿に専従することが狩猟民といえるかどうか、慎重に考える必要がある」と指摘している（同前：131）。また千葉氏によれば、国頭村においては猿師の山の神に対する信仰があるといい、海神祭のときにうたわれる神女のウムイ〔神歌のこと－引用者注〕の中にも猪が出てくる（千葉、1971）という。しかし筆者が話を伺った大宜味村のヤマシトゥヤーの方々からは、特に独特的神観念や習俗などは見られず、狩猟に関する儀礼などの話も聞かれなかつた（注2）。

少なくとも大宜味村におけるヤマシトゥヤーは「狩猟民」というカテゴリに当てはまるとは言えず、彼らは戦前から「日常生活の中で必要に駆られて」猿を行ってきたように思える。それではここから、ヤマシトゥヤーの姿が戦前からどのように変わつていったかを整理していきたい。

戦前まではシシガキによって、耕地がヤマシシによる獣害から守られていたため、ヤマシトゥヤーといえば特殊な人であったという。当時からヤマシシは農作物を荒らす害獣ではあったが、わざわざシシガキを越え、外山まで出かけていって猪狩りを行う人は「相当ヤマシシの肉が好きな人」であったのだそうだ。

しかし戦後になってシシガキがその役割を果たさなくなると、ヤマシシによる農作物への被害は拡大

していく。そのため一部のヤマシトゥヤーだけではヤマシシの退治が追いつかなくなつたと考えられ、実際畠に罠を仕掛け、独自にヤマシシを捕っていた農家が多かった時期もあったという。この場合の猿は、猿師によって行われるものではないので、これらの農家が特にヤマシトゥヤーと呼ばれるることはなかった。だがその後、猪狩りを行うためには狩猟免許が必要だという規制が一般に浸透し、ヤマシシを捕る人が再び減つてからは、免許を持って猪猿を行う人を指してヤマシトゥヤーと呼ぶようになつた。以上のような変化を経て、彼らにヤマシシの退治を依頼するという現在の形がとられ始めたと考えられる。

現在猿を行うためには、罠を使用した猿でも銃を使用した猿でも資格免許が必要となる。「狩猟免許」には、甲種・乙種・丙種（平成14年度現在）があり、甲種は網・わな、乙種は銃器、丙種は空気銃・ガス銃を使用する狩猟の免許である。また狩猟免許の他に、実際に狩猟を行う時は「狩猟者登録証」がなければならない。これは、狩猟を行う都道府県ごとに入猟税と狩猟者登録税を支払って申請するものであり、登録されると狩猟者登録証と記章（バッジ）が交付され、猿が可能になる。さらに、銃器を使用する猿ならば「銃砲所持許可証」も必要である。これは住所地を管轄する警察署で、猿銃に関する試験に合格した後に申請をするものである。銃砲所持許可証を受け取れば、銃砲店で銃を購入することができる。

狩猟を行うということは様々な危険が伴うため、書類の申請などの手続きは非常に多い。「狩猟免許」は3年に一度、「狩猟者登録証」は毎年、名護市にある北部林業事務所で更新しなければならないし、「銃砲所持許可証」も3年に一度警察署での更新が必要である。特に銃器に関してはそれだけではなく、所持する銃弾の数を報告したり、警察が要求すれば所持する銃器の検査に応じたりする義務もある。現在大宜味村では銃器による猪猿が多いが、「手続きが面倒だから」と銃を手放し、猿をやめてしまった人もいる。

このようなことから、現在のヤマシトゥヤーの数は少ない。実際猿を行なっていた人の話によれば、村全体で10人に満たないほどではないかという。少

数のヤマシシトゥヤーによる害獣駆除が行われているため一人あたりの駆除頭数は多く、年間約20頭のヤマシシが一人によって駆除されている。過去には、2ヶ月間で24頭ものヤマシシを捕つたという人もいる。

## 2. 猿活動の実際

### (1) 猿を行う際のさまざまな規約

現在猿を行う際には、「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」で定められたさまざまな規約があり、害獣駆除をするためであっても、自由に猿を行ったりヤマシシを乱獲したりしてはならないとされている。

まず基本的に猿を行える期間は決まっている。猿の解禁日は11月15日から2月15日までの3ヶ月間であり、その他の期間は「禁猿期」となる。また、猿が行える場所にも制限があり、狩猟者登録をした人には毎年「禁猿区」に関する地図が配布される。禁猿区に指定された場所は、その中に耕地があつてもそこで猿を行うことは出来ない。

しかし村役場に「有害鳥獣駆除の申請」をし、県からの許可が下りれば禁猿期でも特別に猿を行うことが出来る（注3）。

禁猿期間の有害鳥獣駆除に関する手順は、まず1ヶ月内で駆除する予定の猪の頭数を申請し、「鳥獣捕獲許可証」を交付してもらう。このときは、村役場に猪による害の証拠を提出しなければならない。証拠とは、被害を受けた畑の写真と、害獣駆除の依頼者によって書かれた「有害鳥獣駆除依頼書」である。そして許可が下り、捕獲した後は、再び村役場へ行って実際の捕獲頭数を報告するのである。

書類上では、始めに申請した頭数以上の猪は駆除しないことになっており、報告頭数が申請頭数を上回ることはない。しかしそれらの数字はあくまで「禁猿期に害獣駆除をするものとして大宜味村役場に申請された頭数・報告された頭数」であって、役場の人の話によれば、実際に駆除された数や猿が解禁されている期間に捕られた数など、報告されていないものを合わせれば、実のところはこれ以上に捕獲されているかも知れないという（注4）。

### (2) 猿の方法

沖縄本島北部における猿について、これまでに

いくつかの報告がなされてきたが、今回の調査では伝統的な猿の方法に関する情報は十分に得られなかつた。以下では、今回の調査で聞き取ることが出来た猿法を主として述べることにする。

#### ①戦前における猿

まだヤマシシトゥヤーが特殊な人であったとされる戦前の頃は、畑に罠を仕掛けたり、現在のように銃を使ったりする猿は行われていなく、原始的な方法による猿が主となっていた。それはインビキ（犬引き）とかインビカーと呼ばれる猿法で、その名の通り猿犬を従えての猿である。現在でも猿犬を使った猿は行われているが、戦前当時は猪を仕留める道具がヤリやハンマーであった。後進や頭から山を駆け下ることのできないヤマシシを、猿犬を使って谷間や岩穴などこれ以上逃げられない場所に追い込み、ヤリやハンマーで仕留めるのである。しかし、ヤマシシに接近して直接手で仕留めるこの方法は危険が伴い、手負いのヤマシシに反撃されることもあった。

また猿犬について、猿の際に連れて行く猿犬は複数頭いるといい、その中でも一番賢く力のあるものが中心となってヤマシシを追う。その犬種にはこだわらないとされるが、一般的にはトウラーという種類の琉球犬が良いといわれている。そして猿が成功し獲物が得られると、猿の中心を担った犬には一番最初に褒美の肉や内臓が与えられた。



写真8 畑で発見されたヤマシシの足跡

## ②罠による猪獣

次に、農家の人々も独自に行っており、畑に仕掛けた罠による猪獣について述べたい。伝統的な猪獣の方法においては罠の中にもいろいろな種類があり、例えばサギヤイ（下げ槍）や据え銃などといった罠があったようだが、今回の調査で主に聞かれたのはワイヤーを使った罠で猪獣を行う方法であった。それはワイヤーがヤリや銃よりも比較的簡単に入手できることによるものだったと思われ、広く行われていたようだ。

農作物がヤマシシによる被害を受けているかどうかは畑についた足跡から判断でき（写真8・写真9参照）、罠を仕掛けるときは、まずウジを探すことから始める。ヤマシシがどこから畑に入り、出ていくのかを把握してから罠を仕掛ける場所を決めるのである。実際に罠を仕掛けた経験のある男性によれば、罠は畑に入ってくる場所よりも、畑から出て山に帰る道だと思われる場所に仕掛けたほうが捕獲率が上がるのだという。それは、人間の匂いがついた畑に入る前のヤマシシは非常に警戒している状態であるためで、農作物を食い荒らして満腹になった状



写真9 畑で発見されたヤマシシの足跡



写真10 ワイヤー罠

態だと、ヤマシシの気は少し緩んでいるのだそうだ。

そうして罠を仕掛ける場所を決めたら、実際に罠を作る。ワイヤー罠にもまた複数の種類があるというが、今回の調査で聞かれたのは、ワイヤーで締め輪を作つて一端を固定し、ヤマシシが逃げられないようにするという仕掛けである。

ワイヤーで作る輪は基本的に直径25cmから30cmのもので、それはヤマシシの頭部が入る大きさである（写真10参照）。その輪はヤマシシが逃げようと引っ張ると、次第に締まっていく仕掛けである（写真11参照）。そしてそのワイヤーで作った締め輪の先は、弾力性があって折れにくい木、またはススキや竹を束にして地面から抜けないようにしたものなどにくくりつけられ、固定される。しかし、罠を仕掛けたい場所にそれらのような植物が必ずしも生えているとは限らないので、その場合は2m位の長くて非常に丈夫な棒の中間辺りに固定する（写真12参照）。こうすれば、ヤマシシが逃げようとしても長い棒がどこかに引っ掛かってしまい、遠くまで行けないのである。

大体、締め輪を地面につけて置いた場合は足が、地面から5cm以上の高さに置いた場合は首がかかることが多い、ヤマシシは自分の足をちぎってでも逃げようとするので、首がかかるように狙つて罠をしかける方がよいという。しかしそうすると、ヤマシシは死んだ状態で罠にかかっているのを発見されることが多いので、その肉は腐敗し始めてしまい、発見が遅れると食べられないことがある。また罠を仕掛ける際は、ワイヤー自体についた人間の匂いでヤマシシが罠に近づかないと困るので、あらかじめワイヤーを湯で洗つて風雨にさらすといったような

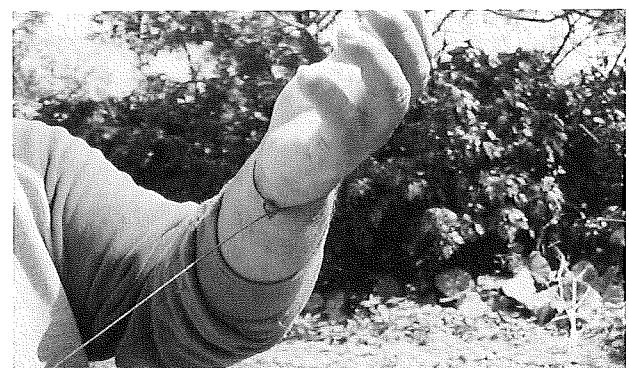


写真11 ワイヤー罠の写真。逃げようと引っ張ると、ワイヤーが締まる仕組み。

用意をすることもある。それでも罠を仕掛けてからヤマシシが掛かるまでには、1週間以上も後になるという。



写真12 フイヤー罠の写真。人物の横にある棒は、約2mある。

### ③銃による猪猟

最後に、大宜味村において現在主に行なわれている、銃を使った猟法について述べたい。かつては「据え銃」などといった、銃を使った罠もあったそうだが、現在では禁止されており行なわれていない。銃を使った罠で実際に猟を行った例は、今回の調査では直接聞くことが出来なかった。

ヤマシシトゥヤーは、彼自身が自らの畑に残されたヤマシシの足跡を見たり、人からヤマシシを目撃したという情報を得たりして獣害に遭ったと判断し、猟を行う。罠を使った猟同様、銃による猪猟においても最初に行なうべきことはウジの確認である。銃による猪猟は罠とは違い、動いているヤマシシをその場で撃つというものであるため、ヤマシシが出現する場所は勿論、そこに現れる時間などもあらかじめ下調べしておき、ヤマシシに出会わなければならない。その点においては罠による猟よりもかなり計画的に行なわれる猟である。ウジは一定時間（2時間など）おきに見回り、ヤマシシがそこを通過する時間を特定するという。ヤマシシは毎日決まった時間にウジを通る習性があり、時間ぴったりに現れるそうだ。現在も猟を行なっている人の話によれば、ヤマシシがウジを通る時間は「(前の日の差と)引

用者注) 5分も狂わない」らしい。

ヤマシシがウジを通る時間が特定できると、ヤマシシトゥヤーはその時間に合わせてウジや畑にヤマシシが現れるのを、身を隠して静かに待ち伏せる。その場所は草木の茂みか木の上など見つかりにくい所がよいとされる。そして獲物が現れるとゆっくりと接近して銃を構え、狙い澄ませる。ヤマシシは人間が風上にいると、その匂いで数百メートル先からでも感づいてしまうので、風下から接近しなければならないが、そうすればヤマシシは目が悪いのか、それとも食べるのに一所懸命なのかは分からぬといふが、3mから4mまでは近づけるという。

また銃を撃った後は、獲物が絶命したと確認できるまで直ちに近づいてはならない。手負いのヤマシシは大変凶暴で、襲いかかってくる恐れがあるからだ。あるヤマシシトゥヤーは、実際それによって体当たりされた上、鋭い牙で傷つけられて何針も縫う怪我を負ったと話す。

銃について、使用する銃は散弾銃であり、それを撃つことができるのは日の出から日の入りまでと規定されている。以上のように銃を使った猟は、さまざまな規制や技術が伴うため非常に計画的に行なわれる。

前節で述べた通り、現在大宜味村で行われている猪猟は専ら「害獣駆除」が目的である。大宜味村においては現在、猟銃でもって大型の動物を捕殺しているものの、「防御的狩猟（注5）」が行なわれている。このような猟は、ヤマシシの棲息場所まで赴いて行なうのではなく、畑やその付近で行なわれ、さらに獲物に特別な経済価値を見出すことはない。シシガキが機能し、ヤマシシトゥヤーが積極的に深山へ入って、肉を得るための猪狩りを行っていた頃と比較し、「攻撃的狩猟」から「防御的狩猟」へと変化していったものだと思われる。

しかしながら次節で述べるとおり、猟の獲物となつたヤマシシは「経済価値」とまではいかないが、人々によって独自に解体され、消費される。次節では、その詳細を述べていきたい。

## 第三節 捕らえたヤマシシの処理・消費

### 1. 捕らえたヤマシシの解体・消費

捕らえたヤマシシ（写真13参照）は猟場から家に

持ち帰り、解体をする。猪は家畜ではないため食肉センターに持つていて解体させる必要はなく、独自で行うものである。ここでは、ヤマシシの解体の手順と肉の消費について述べたい。

獲物が捕れると、その解体は数人が手伝って行なわれる。罠にかかってまだ生きているヤマシシならば、まず首を切って血を抜くことから始めるが、銃による獵などで既に絶命しているヤマシシは首を切つても血は流れないのでそのままにしておく。この場合は、後でヤマシシの腹を割いたときに胃の辺りに溜まっている血の固まりを取り出す。これはウブサーと呼ばれ、以前はチーイリチー（血の炒め物）などにしたというが、現在では衛生上の理由からあまり口にしないそうだ。

1960年代に行われていたという解体方法の手順では、まずシンメーナビという大きな鉄製の鍋の中に湯を沸かし、その湯をヤマシシの体にかけてその上から毛布やカマスを被せる。これは毛と皮を蒸らしてふやかせ、後で剥ぎ取りやすくするためである。次に、ふやかせたヤマシシの体に藁をかけ、藁を燃やす。そうするとヤマシシの毛が燃え落ちて体は蒸し焼きの状態になり、その後はタワシなどで擦って皮ごと毛を刮ぎ取る。藁で体を燃やし、タワシで毛を剥ぎ取るという行程を、毛がきれいになくなるまで繰り返すと、豚のように真っ白になるという。これらが終わると首を落とし、腹を割いて内臓やウブサーを取り出し、包丁やナタで肉を切り分ける。

対して現在行なわれている解体方法は、最初からバーナーで真っ黒になるまで毛と皮を焼き、タワシで皮を擦って毛を刮ぎ取るというものである。その後は以前と同様で、首を落とし、腹を割いて内臓や



写真13 仕留められたヤマシシ

ウブサーを取り出し、包丁やナタで肉を切り分ける。バーナーを使うことによって、現在の解体方法はより簡単になっているが、それで毛と皮を焼くと、皮が茶色くなり、刺身にしたとき肉が焦げ臭くなつておいしくないという。また刺身にする場合は、獲物を生け捕りにした時など肉が新鮮であれば可能だが、現在では新鮮でも生肉につく菌を恐れて刺身にすることはあまりないという。

解体後の肉は隣近所の人々を呼んで食べる。呼ばれた人達は酒やビールを持って訪ね、ヤマシシ料理を振舞つてもらう。ヤマシシ肉の料理は、汁か焼き肉にすることが殆どで、汁にはフーチバー（よもぎ）を入れるとおいしい。ヤマシシの肉には独特の風味があり、それを好んで食べる人は多い。人によって好みはあるが、一般にボージシ（背中あたりの肉）が一番おいしいといわれる。以前は内臓も食べていたという話だが、内臓には回虫などの虫やその他の菌などがいる恐れがあり、衛生的によくないと分かつてからは食べずに畑の肥料にしているという。しかし特に胆のうはイと呼ばれ、あるヤマシシトウヤーの話によれば、イを乾燥させて泡盛に漬け込むと、とても良い胃薬になるそうだ。実際、これで潰瘍を治した人もいるといい、非常に効果があると話す。

ヤマシシの肉を振舞わされた人は、ヤマシシトウヤーに対し「クワッチャサビタン（ごちそうさま）」ではなく「タラジサビタン（不足しました）」または「タラジしました」と言う。これは次の獲物が捕れるようにとの縁起だとしたり、ヤマシシトウヤー本人が「ヤマシシの肉はもう満足なのか」と思い、捕らなくなってしまうのを避けるためだという。

これは現在でも使われている言葉で、村の人々にとってヤマシシの肉を食べることは非常に楽しみであるということを知ることができる。現在ではヤマシシの肉を冷凍保存しておいて小規模に販売を行っている人や、ヤマシシ牧場を持っている人もいる。その肉を買うのは販売している人の知り合いなどが多く、口づてで買いに来る。

## 2. ヤマシシの処理

前節で述べたとおり、大宜味村には昭和60年から有害鳥獣駆除事業に対し、村の予算内で補助金を交付するという規定がある。この規定によって、駆除

したヤマシシの下顎と「有害鳥獣駆除事業補助金交付申請書」を村役場に提出すると、1頭あたり2600円が申請者に補助金として交付される。しかし、害獣駆除に対する補助金が支払われるという制度自体は昭和60年以前にもあったようで、「一九六五年から琉球政府は積極的に猪駆除対策にのりだし、関係市町村に猪垣修築補助金および猪捕獲補助金を交付」していたという（平敷 1991：226）。しかし、改めて昭和60年から「大宜味村有害鳥獣駆除事業補助金交付規定」が施行されたということは、恐らく1965年以後、山林の開発等で猪垣の修築が殆ど意味をなさなくなってしまい、ヤマシシによる被害を被った農家が独自に駆除を行う中で、害獣駆除事業が各市町村に委ねられ、そのレベルで補助金が交付されるようになったのではないかと思われる。

現在は、予算が許す以上の駆除頭数に対する補助金は交付されないことになっている。平成14年度は、猪に関しては10頭分までが交付の対象となったが、予算次第では年によってその頭数が増減する。

また、補助金交付の申請ができるのは狩猟免許保持者、すなわちヤマシシトゥヤーである。現在村内には10名未満のヤマシシトゥヤーがいるが、毎回同じ人が補助金をもらうのは不公平であるため、「今回は誰が補助金をもらうか」ということを全員で集まって話し合いで決めるのだという。そしてもらう人が決定すると、その人は村の狩猟者の代表として10頭分の交付金を受け取るのである。このようなところをみれば、大宜味村においては狩猟者同士の交流があるようだ。彼らの間では猟銃の譲り合いやヤマシシに関する情報の交換も行われている。残念ながら今回はその全員に会ってお話を伺うことはできなかったが、10名未満という少ない人数が交流を可能にしていると思われ、彼らの相互関係も非常に興味深い。

### 第三章 ヤマシシに対する人々の認識

#### 第一節 農家

近年になって山の開発は進み、ヤンバルの森は徐々に野生生物が住みにくい環境になっている。ヤマシシもその影響を少なからず受けているはずであり、正確な調査は未だなされていないが、個体数は減少の傾向にあると考えられる。

実際「昔ほどはヤマシシの姿を見かけなくなった」と話す人は多く、ヤマシシの減少を認めている。かつて畠に侵入してくるヤマシシを罠でもって自ら捕え、食べていた人も「今はかわいそうだと思うし、自分では捕らない」という。さらに、リュウキュウイノシシが貴重な野生生物だとみなされ、それらを保護しようとする動きについても農家は寛容である。

ヤマシシに対して可哀想だという気持ちが生じたのは、まず環境保護の視点から重要視されている「ヤンバルの森」を村にすむ人々も意識し始めたことと、主食が自家栽培のイモから販売されている米に成り代わり、ヤマシシやその他の動物による獣害が、家庭の食卓に直接的な打撃を与えるものではなくなつた事によるものだと考える。

しかしながら農家の人々は、かわいそうだと思う一方で、畠に害を与えるヤマシシを狩ることについては「畠を荒らすから仕方のないことだ」とも言う。それはヤマシシによる農作物への被害が現在でも後を絶たないからであり、これまでにも述べたとおり農家にとっては、生活を脅かす存在なのである。

#### 第二節 ヤマシシトゥヤー

現在大宜味村に住む人々の中で、ヤマシシと一番密接なのはヤマシシトゥヤーの方々である。農家の人に依頼されて少人数で村内のヤマシシの駆除を請け負う彼らは、他の誰よりもヤマシシのことについて知識があり、現在ヤマシシを取り巻く状況も敏感に感じ取っているのではないだろうか。かつては、一人で2ヶ月の間に24頭ものヤマシシを仕留めることもできた時期もあったのに対し、現在では1年で約20頭しか捕れなくなった。その点からもヤマシシは明らかに減少していることに気付いている。

しかしヤマシシトゥヤーは狩猟専従者ではなく、農業や林業を兼業している。そのため猪による害は他人事ではなく、ヤマシシに対する認識は農家の人々と同様であると思われる。一時期、リュウキュウイノシシを保護するものとして害獣駆除が制限されようとしたことがあったそうだが、「猪が好きでヤマシシの乱獲をしているわけではない。もし制限されても、畠に来て荒らすものに対しては捕る。と言って反対した」と話す方もいた。

### 第三節 農業を行わない人々・塩屋保育所

前節までは、農作物をめぐって攻防戦を繰り広げ、害獣ヤマシシと深く関わりを持ってきた農業従事者について述べたが、ここで最後に、農業に携わらない村の人々が、ヤマシシをどのように認識しているのかを考察したい。その例として「塩屋保育所」を以下に紹介する。

大宜味村には、喜如嘉保育所・塩屋保育所の2カ所の村立保育所がある。各保育所では、1996年より「地域に根ざした保育」を目指すものとして喜如嘉保育所で「ぶながや（木の精）」、塩屋保育所で「ヤマシシ」を保育テーマにしている。

塩屋保育所では普段の保育活動からヤマシシをテーマに取り入れ、例えば子どもを誉めるときも叱る時も「ヤマシシみたい」という言葉をかける。それはヤマシシの生態や行動がヒントになっており、ヤマシシの好ましい点に似た子どもの行動が誉める対象、そして好ましくない点に似た子どもの行動が叱る対象となっているわけである。

その他にもヤマシシをテーマにした遊戯・劇を運動会や地域のイベントで披露したり、第一章第三節で紹介した絵本『ヤマシシとだいこん』などを独自に作成して読み聞かせたりと、農家にとっては害となっているはずのヤマシシが、可愛らしくキャラクター化されている。ヤマシシは「暴れん坊だが、とても元気で頭が良い」動物だというイメージがあるのだという。

塩屋保育所のヤマシシに対する認識は、農業従事者ではない人々にも通ずるものがあると思われる。ヤマシシが農家に被害をもたらす害獣であるとは知っているが、農業や林業に従事していない人々にとっては、ヤマシシは恐るべき、または憎むべき存在ではない。どちらかといえば、減少しつつあるヤマシシに同情し、野生生物と人間の共存を理想としている。

ヤマシシを「害獣」と見るか「貴重な野生生物」として捉えるかは、少しばかり皮肉なことではあるが、ヤマシシとの関わりの多寡による気がしてならない。彼らとの距離が近く、互いに生活が掛かっているという点で非常に密接な関係を持つ農家の人々と、それらを認知していくながら自らの実生活にはあまり影響しない人々の間には、ヤマシシに対する認

識に少々の差があると思われる。

### 注 釈

#### 〈注1〉

篠原徹は、新しい民俗学の分野である環境民俗学を提唱し、それについて「[人の一引用者注] 生活世界と生物的世界に代表される環境との、トータルな関係性の歴史と現在を追究すること」だとした（篠原、1997：16）。この分野は、本稿の目的に近いものだと考えられ、実際そのようなものを目指した。

#### 〈注2〉

本来ならば、宗教的・儀礼的な側面からもヤマシシを捉え、例えば集落の神女などにヤマシシが関わる行事の有無やその意味などの話を伺うべきであつたが、本稿のテーマである「猪と人々の生活の全体的な関係」を述べる中、今回は日常生活に主眼を据えた調査を行った。しかし、宗教的・儀礼的観点から猪と人の関係を考察することも非常に重要なことで、猪獣や猪そのものに対する宗教的意味づけが可能だとすれば、それを今後の課題としたいと思う。

#### 〈注3〉

これは大宜味村が有害鳥獣駆除事業に対し、村の予算内で補助金を交付するという規定に基づくもので、昭和60年4月1日から施行されているものである。

#### 〈注4〉

ちなみに、平成14年度の年間を通しての猪駆除報告頭数は、申請数が24頭だったのに対し、報告数は17頭であった。報告数が申請数を上回っていないところから、猪の個体数は減少の傾向にあると伺えるが、獵前後の煩雑とも言える手続きや、決して単純ではない猪獣の実際も、その原因の一つだと考えられる。

#### 〈注5〉

萩原氏は「農作物を鳥獣から守るために狩猟と獲物に積極的な価値を求める狩猟とでは、動物に対する態度に違いがみられる」とし、狩猟は防御的狩猟と攻撃的狩猟に分ける見方があると述べた（萩原、1996：196）。さらにこの2つの分類については、「防御的狩猟は耕地に侵入しようとする動物を罠などで待ち受けて捕殺する消極的な狩猟である。これに対して攻撃的狩猟は、人間の側から動物の棲息領

域に進出して捕獲する積極的な狩猟であり、獲物のもつ経済的価値を目的とする場合が多い」としている（萩原、1996：197）。

### 参考文献

- 池原貞雄・宮城邦治・与那城義春・当山昌直. 1984. 琉球列島動物図鑑(1)陸の脊椎動物. 新星図書出版
- 池原直樹. 1979. 沖縄植物野外活用図鑑－第6巻 山地の植物－. 新星図書出版
- 今井一郎. 1980. 「八重山群島西表島におけるイノシシ猟の生態人類学的研究」. 民族学研究45(1). 日本民族学会
- 大宜味村教育委員会. 1994. 大宜味村の猪垣 一猪垣調査報告書－. 大宜味村文化財調査報告書第3集. 大宜味村教育委員会.
- 大宜味村史編集委員会. 1978. 大宜味村史(資料編)
- 大宜見村. 1979. 大宜味村史(通史編). 大宜味村史編集委員会.
- 大宜味村立塩屋保育所. 1997. ヤマシシ(絵本). 大宜味村立塩屋保育所.
- 大宜味村立塩屋保育所. 2000. ヤマシシとだいこん(絵本).
- 沖縄県環境保健部自然保護課. 1996. 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータおきなわ－. 沖縄県環境保健部自然保護課
- 沖縄大百科事典刊行事務局(編). 1983. 沖縄大百科事典上巻・下巻. 沖縄タイムス社
- 「角川日本地名大辞典」編纂委員会. 1986. 角川日本地名大辞典47(沖縄県). 角川書店
- 環境庁自然保護局野生生物課. 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータブック－(脊椎動物編). 日本野生生物研究センター
- 篠原徹. 1990(初出1988). 「自然・生態・民俗」自然と民俗 心意のなかの動植物. 日本エディタースクール出版部.

篠原徹. 2001(初版1997). 「12のアプローチ 環境民俗学」. アエラムック(民俗学がわかる.). 朝日新聞社

新谷尚紀編著. 2000(初出1999). 民俗学がわかる事典. 日本実業出版社

大日本猟友会. 1992. 狩猟読本. 社団法人大日本猟友会

千葉徳爾. 1971. 「南西諸島のいのししとその狩猟」. 続 狩猟伝承研究. 風間書房

永松敦. 1997. 「狩猟」. 野本寛一・香月洋一郎編.

講座日本の民俗学5〈生業の民俗〉. 雄山閣

萩原左人. 1996. 「暮らしと動物」. 野本寛一・福田アジオ編. 講座日本の民俗学4〈環境の民俗〉. 雄山閣

平敷令治. 1991. 「山原の猪垣・猪狩・猪狩儀礼」. 神・村・人 琉球弧論叢. 第一書房

山原猪研究会. 1994. 「ウーガチ 奥特集」. 山原猪研究会 会報(1). 山原猪研究会

平凡社地方資料センター. 2002. 日本歴史地名大系 第四十八巻. 沖縄県の地名. 平凡社

### 参考資料

- 大宜味村役場企画財政課. 1999. 平成11年度 離島・過疎地域ふるさと活性化推進事業 小冊子. 長寿の里・芭蕉布の里・シークワーサーの里・ぶながやの里. 大宜味村

大宜味村立塩屋保育所. 1996～1999.

「自主研究レポート」. 大宜味村立塩屋保育所.

津波高志他. 1982. 沖縄国頭の村落(上巻). 新星図書出版

### 参考WEB SITE

大宜味村 WEBSITE.

<http://www.vill.ogimi.okinawa.jp/>